
BlueStone 【木陰】

空魚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BlueStone 「木陰」

【Nコード】

N0678E

【作者名】

空魚

【あらすじ】

生活圏を空に移した人々の日常は平穏に過ぎているかに見えた。しかし、二人の少女が出会った時、変化は始まった。何故少女は地上を目指したのか？BlueStoneのもう一つの物語。

一章 別れ道

溶岩が氷を解かし、海が大地を洗い、地上の文明を悉く滅ぼして、地球はその主導権を己が手に取り戻した。今や僅かな土地だけを残し、水の惑星に生き残った人間の総数は約千名。彼等は地上から空へ逃げ延び、通称“箱舟”と呼ばれる浮島で新たな生活を始めることとなった。

『三千年史』七十二節より抜粋

美術館はあまりにも人が混んでいて、蔓で編んだカゴを下げたモルチェは、通りの片隅にある小さな路地で小さな小さな溜め息を漏らしていた。

「エトランゼったら一体どこにいるのかしら？」

ツイツと顔を上げれば遠く澄んだ青空が広がっている。霜が降りたような薄い雲は、日の光を受けて輝いていた。

赤毛の少女は深い翠玉の瞳を細めつつ、太陽のある方向に顔を向けた。柔らかな産毛がモルチェの細めの顔を金に縁取る。

「ま、いいわ。どうせ下魚の時間（午後三時）にはあの喫茶店に行くでしょうし」

一束にたばねた癖のある髪を片手で弾き、モルチェはカラの編みカゴを物足らなさそうに肩にかついだ。

「はあ……あの、もう一度お願いしたいんですけれど」

滑らかな栗色の髪が若い果実のような頬に落ちるのもかまわず、少女は首をかしげた。

「あ、はい。あのですね、駅はどちらでしょう？」

彼女の前に立ちはだかったのは、色素の薄い髪を三つ編みに編んだ濃紺の瞳の学者風の男だった。眉が細いせい、軟弱そうな印象

が随分強い。年の頃は十代後半ぐらいに見えるが、実際はもつと年をくつっているのかもしれない。

「ああ、駅ですか。それでしたらこの道を真つすぐに、三つめ……いいえ、四つ目の角を左に曲がれば正面に出ると思います。駅の風貌について、説明は要りますか？」

薄い黄色の瞳を細め微笑む少女に、男は胸の前で手を小さく左右に振った。

「それには及びません。依然来たことがあったのですが、道順を度忘れしてしまいましたね」

石作りの美しいアーチを持つ建物でしょう？ と、男は確認するように付け加えた。

「ありがとう。どうもこの街は路地が多く、迷いやすい」「調査にみえたのですか？」

優しい笑みを保ち続ける少女に、男もはにかんで応えた。

「まあ、そんなところです。随分昔に生えていた杉の種子が残っていたらしく、この街の東の森にそれらしいものが見つかりましてね。中央に報告しに行くところなんですよ」

「学者の方々も大変ですね」

男は小さく肩を竦めた。

「ところがそれが、楽しくて仕方ないんです。もう一度このジェントル・ブリーズの街に来ようと思っっていますが……っと、もうこんな時間か」

街の中央部から下魚の時を知らせる鐘の音が響いてきたのに気づき、男は少し焦ったように胸のポケットから丸い物を取り出した。手巻きで旧式の『懐中時計』というものだった。

「今度、お礼します。えっと、来月の三日頃には戻ってきますから、この時間にここで待っていて下さい」

一方的にそう言い置くと、男は少女に言われた通りに真つすぐと駅へ向かって駆けていった。

「あら、せっかちな人。せっかくお知り合いになれたのに……けれ

ど、いいわ。モルチェに話すことが増えたんですもの」

おっとりと頬に手を当てて、少女エトランゼは男の走っていった方向を見つめた。

窓の外の空には、様々な配色のグライダーが思い思いの方向に飛び交っていた。

「何、物思いに沈んでいるの？ エトランゼ」

ほお杖をついてぼんやりとしていたエトランゼはピクリとその声に反応し、向かいの席に着いたモルチェの方に目だけ動かした。

「モルチェ、空を飛びたいって思った事ある？」

モルチェはウェイターに野菜ジュースとハムサンドを頼むと、エトランゼの突拍子もない言葉に眉を寄せた。

「エトランゼ、どうしたの？」

「空を見ていたの。雲の形をたどるようにして。いつもの空なのに、急にもっとあそこに近づきたくなったの」

再び視線を遠くにやったエトランゼの横顔を見つつ、モルチェは運ばれてきたハムサンドを一切れ、口に運んだ。

「あんたって分からない奴ね」

つまらなさそうにそう言った友人に、エトランゼはようやく顔を向けた。モルチェとは対照的な癖のない前髪が、優しげに揺れる。

「雲が綺麗だとか、星が綺麗だとか……そんなこと言っただって雲や星はお礼なんかしてくれないわよ？」

モルチェは早口でそう言ってしまってから、少し調子を落として続けた。

「今日だってあんたがどうしても絵が見たいって言うからこうして下射手（正午）からアートパレスの前で待ってたのに」

「ごめんなさい。時間に遅れてしまって、もう貴女はいないだろうと思ったの。怒ってる？」

テーブルの上のティーカップを手に取り、モルチェは温かさを確認するようにそれを両掌で包んだ。

「……まったく、もう。怒っちゃいないわよ。一体何年付き合ってると思ってるの？ あんたのマイペースにはもう慣れ切ってるわ」
疲れたとでも言いたげに、モルチェは肩を落とした。

「で、今日は何が囁きかけてきたのよ」

常ならばここで花が、とか草が……といったような答えが返ってくる。が、モルチェの予想は珍しく外れた。

「男の人が。東の森を調査されにみえたらしいの」

実に楽しそうに話すエトランゼの様子に、モルチェは嫌な予感がした。

「私達もそこに行こう、とか言わないわよね？」

「モルチェ、ついてきてくれないの？」

自分がついてくることを前提にしていたらしい少女の様子に、モルチェは大きく溜め息を吐いた。

「で、その男の人は？ 名前とか、何か聞いてないの？」

言われて初めて、エトランゼは相手の名前を聞いていなかったことに気が付いた。

「名前は伺っていませんけれど、来月の3日頃にまた会いましょうって言われました」

「ふーん……で、その人、格好よかった？」

モルチェの瞳は少し輝きを増したようだったが、エトランゼは特に意識していないようだった。

「土の匂いがありました。少し痩せ気味で……結構かわいい方でした」
にこやかに告げるエトランゼ。

「かわいいって……」

モルチェは「やっぱり変わってる」と思いつつ、普段と調子の変わらないエトランゼを眺めた。

「今度その人に会ったら言っておけば？ きつと喜ぶわ」

投げやりにそう言つと、モルチェは席を立った。

「そうね」

やはり同じように席を立ちつつ、エトランゼは嬉しそうにモルチ

エに同意した。

「で、どうするの？」

皮肉はエトランゼに対して何の役にも立たない。それを知りつつ口にしてしまった自分自身に、モルチェは呆れていた。

「どうしたらいいんでしょう？」

逆に問い返され、赤毛の少女は勘定を払いながら頭を働かせた。

「あんたってホント手がかかるわ」

モルチェは自分がこの少女の魅力に取り付かれていることを知っていた。結果、愚痴はいつも独り言になってしまう。

「前に森の空気は朝が一番だとか何だとかって言ってたのはあんたでしょう？ 明日、上牡牛（午前五時）の刻に街の外門のところで待つてること。分かった？」

喫茶店の扉を開けると、設置されている鐘がカランカランと良い音を上げた。

「見て、モルチェ。空が綺麗……向こうの方なんて赤いギヤマンを何層も重ねてあるみたい。東の果てはもうあんなに深い紺色をしているのに」

頬をうつすらと染めて、エトランゼは空に見入っていた。人にはあまり興味を示そうとしない彼女だが、普段の何でもない景色や石畳の透き間から生え伸びてくる草花にはひどく心動かされるようだった。

「あんた今日は早目に寝なさいよ？ またずっと屋根の上にいて星ばかり見ていたら、朝、起きられないんだから」

「モルチェったらお義母さんみたいね」

エトランゼの言葉にモルチェは絶句した。

「ほら、オルソニプター（鳥の翼を真似た羽ばたき飛行機）が次々と舞い降りてくるわ。私にあんなに大きな翼があったら、どこまでもどこまでも空を飛んでゆくのに」

魂が離れていってしまいそうな面影に、モルチェはギクリとした。時々、エトランゼはそのまま空気に溶け込んでゆきそうな表情を見

せる。

「何言ってるのよ、免許もないくせに。じゃ、私はこっちだから」
言いつつ、向かって左側の道を指さすモルチェ。エトランゼは頷くと小さく手を振った。

「また明日」

エトランゼと別れると、モルチェは大きく背伸びして息を吐いた。
「やれやれ、ね」

まもなく赤いギヤマンの空は、剥ぎ取られてゆくように宙本来の色に戻っていった。

弓なりの月は、最早すっかりと色あせて西の空に在った。それは対照的に、東の空では生まれたての太陽が下に広がる街の色を徐々に蘇らせながら上へ昇ろうとしている。

「森が燃えそう……」

起きたばかりの頭は、まだ十分な思考能力をモルチェに与えていなかった。ぼんやりとした意識は原始的な感覚を明確にするのか、彼女は全身で景色の変化を受け止めていた。

（エトランゼがこんな景色を見たら、どうなってしまうんだろう？）
ふとそんなことを考えて、モルチェはゆっくりと視線を横に流した。

（ルチル先生は言ったわ。この世には無駄なものなんて何一つないって。エトランゼこそがそれを一番肌で感じられるんだわ）

モルチェは昨日自分が口にしたことを思い出した。何て俗物的なものの考え方だったろう。

「あの子はきれいすぎるのよ」

言い訳じみた独り言にモルチェは無償に哀しくなった。羨望という言葉を彼女はまだ知らなかったが、いつも肺の辺りから込み上げてくる熔岩のような感情の名は知っていた。それは嫉妬というのだ。（こんなことを考えては駄目。エトランゼだったらきつとこんなことは思わないわ）

一人でいると、この病はモルチェを苛み続ける。それでもエトランゼから離れることが彼女にはどうしてもできなかった。

（バカみたい。私は私じゃない。エトランゼとは違うもの）

そんなことをつらつらと考えているうちに石畳が途切れ、街の門にたどり着いた。モルチェは顔を上げると白亜の外壁を仰いだ。それは害獣や盗賊の被害に対処するために建てられたものではないために、ひどく繊細な造りになっていた。斧を力いっぱい振り下ろせば、モルチェの力でも壊すことが可能かもしれない。

「昔の人はとても愚かだったって学校じゃ習ったけど、だからこそ美しいものがもっと美しく見たんじゃないかな」

鉄パイプに緩やかなカーブをつけ、それを組み合わせてある門にモルチェは寄りかかった。唐草模様のレリーフの飾りなど、細々とした装飾は朝日を浴びて一層美しく見える。門の蝶番が小さな軋み音をたてた。

「……鳥？……白くて、小さい。翼があんなに薄い……」

視界に入ってくる刺激を記号として受け流しつつ、空を見つめたままモルチェは片足をぶらつかせた。

「嘴が赤い。枸杞の実でもついばんだのかしら……」

これから行こうとしている所から飛んできた鳥は、あつと言う間に視界を横切り、やがて見えなくなった。

（エトランゼったら遅すぎる）

街の方に目を向けたが、道を歩く人影にエトランゼのものはなかった。

（忘れてるのかも）

そよ風に襟元がモルチェの頬をくすぐる。幾度こうしてエトランゼを待ったことだろう？ 幾度こうした不確かな時間を過ごしただろう？

「もう、帰ろうかな……」

来たときにはパン屋や八百屋、魚屋くらいしか扉を開けていなかったのに、今ではほとんどの家が部戸を開けつつあった。

「いつものことよ」

自分に言い聞かせるように呟くと、モルチェは元来た道に戻っていった。

二章 道しるべ

週二日の休みを終え、学校は生徒の声で沸き返っていた。教壇には休み足りなさそうな顔をした教師が立ち、誰が持ってきたのか、花瓶の花も新しいものに代えられていた。綺麗に整頓されていた机は様々な方向へ向きを変え、休みの間の出来事を子供らは口々に言い合った。

けれど、そんな喧噪の中にいながら、モルチェは誰とも話さず、ぼんやりと窓の外ばかり見ていた。始業のベルが鳴っても姿を見せなかった幼なじみのことを考えていたのだ。

（どこに行っちゃったの？ エトランゼったら……）

昨日、結局エトランゼに会うことはなかった。彼女の家にも寄ってみたのだが、朝に出たきりだという。

（先生が聞いても誰も知らないみたいだったし、どうすればいいんだろう）

森を搜索した大人達は、皆、首を横に振っていた。今日もまた森の調査グループとは別の搜索隊がエトランゼを捜しているはずだ。

「モルチェ、エトランゼのことなんて心配しなくてもいいのよ」

隣の席の少女が、ソバカスだらけの顔をほころばせてモルチェに話しかけてきた。

「フェスの言うとおりよ。また、どこかに行っちゃったんだわ」

前の席の少女もそれに同意して低い鼻をスンツと鳴らせた。モルチェはわざと聞こえない振りをし、教壇の方へ顔を向けた。

（マデイエスの河下まで一人で行ってしまったときのようにな？ 私をおいて？ ……そうかもしれない）

四、五日行方不明になっていた三年前のことを思い出して、モルチェは彼女達に気づかれないよう、小さく溜め息を吐いた。

（あの時わたしはどうしてたんだっけ……）

存在意義を失った生きた死人と化していたことを思い出す。

（エトランゼがホントに消えてしまったら、わたしはただの人形になるんだわ）

ネジを巻く主人のないブリキの玩具のように、時の中で朽ちてゆくだけになる……恐ろしい想像に、モルチェは身震いした。

授業が始まり、静かになった教室に一匹の蜂が飛び込んできた。再び騒がしくなった室内で、クラス長の男子が丸めたノートで異邦者を勢いよく殴りつけた。羽を休ませるために窓のサンに止まるうとしていた昆虫は、ポトリとモルチェの机の上に落ち、二、三度体を震わせてから息絶えた。

「何するのよ！」

普段なら気持ち悪いと思う虫の亡骸を手にし、モルチェは叫んだ。隣の席のフェスはとつくの昔に避難していて、モルチェの席の周りには彼女とクラス長のジョンしかいなかった。

「不可抗力だよ。仕方ないだろう？」

モルチェの迫力に押されて、ジョンは少し後じさった。

「窓に近づいてきたなら開ければ済むことじゃない」

そう言っただけで席を立つと、モルチェは教壇の方へ歩いていった。

「先生、少し席を外します」

返事も聞かずにモルチェは廊下へ出た。

掌が汗をかいていた。蜂の骸は軽く、羽の付け根に生えた繊毛の感触などは、あまり気持ちのよいものではなかった。

（エトランゼも死んだらこの蜂みたいに、ただのモノになっちゃうんだわ）

そう思うと急に胸が締め付けられて、モルチェは唇を噛んだ。

「さ、あんたはこの土の中でよくお眠り」

昇降口のすぐ近く、校庭の片隅に靴で穴を掘り、モルチェは蜂を埋めた。

「迷い込むなら、他のクラスにすればよかったのにね」

弔いの言葉を唱え、教室に戻ることなく校門の方へ歩き始める。一歩一歩踏み締めるこの土の下には、一体どれだけの命が埋まって

いるのだろうか？

「私達つてちつぽけね、エトランゼ」

空を、風を、月を、星を……エトランゼが心奪われたものに引き付けられてゆく自分をモルチエは感じた。水の、木々の、土の、太陽の大きさが体の中に浸透してゆく。満たされる感覚。全ての形在るものが無意味になつて行く感覚。人には求められない、魂の安らぎ。

(……探そう)

モルチエはこの感覚を純粹に彼女に伝えたかった。対等に言葉を交わせる者として。今なら通じ合うことができる——そう思えた。

太陽は中天を過ぎ、光の矢をさらに鋭く磨き始めようとしていた。

しかしその日、モルチエの気持ちに反して、エトランゼに関する情報は何一つ得られなかった。彼女自身、エトランゼの養い親に頼み込んで部屋の中をくまなく調べたのだが、手掛かりはチリほども出てこなかったのだ。

(明日、森に行つてみよう)

窓から外に出て、屋根の上で星を見ながらそう呟くと、モルチエは暗く涼やかな夜空を胸一杯に飲み込んだ。

「どうして今まであの子が言うことをもつと真剣に受け止めなかったのかしら」

それが悔やまれてならなかった。青白い燐光を放つ南の恒星郡。十字に輝くあの星座を何というのか、エトランゼならば知っているはずだ。

「覚えている名前はカシオペア座、北極星、琴座のベガ、白鳥座のアルタイルに……他は黄道十二宮」

島が北半球に浮いていたときに見た様々な星。座するのはそれぞれの生き物の魂の夢か？

「北の星座よりもこのほうがもつとはっきり見えるみたい。エトランゼも今頃どこかでこれを見ているんだわ」

白い方解石を含むラピスラズリを思わせる夜空の美しさに胸が震える。モルチェは冷えてきた膝頭を両手で抱えた。

「モルチェ、モルチェッ」

しばらくして父親の呼びかける声が聞こえてきた。その、低い響きは一階のモルチェの窓の方向と同じ向きにある、庭の辺りからする。

「ここよ、父さん」

姿勢を崩しながら答え、モルチェは手入れの行き届いている庭の方へ近づいた。

「そんなところにいたのか。あんな子の真似なんかするんじゃない」
屋根の上を見上げる髭面の男の言葉に、モルチェは唇を噛んだ。
母が亡くなってから父は変わった。人としての余裕をまるで失い、モルチェに対して、厳しいというよりも寧ろ乱暴に接することが多くなっていた。

「何の用？」

四つん這いで下を見下ろし、問いかける。父親の表情は暗くてよく分からなかった。

「お前に届け物だ。今、モイロペリカンが届けた。急ぎのものは知らんが、非常識もはなはだしい」

「分かったわ。今行く」

立ち上がり、藍に染まっている街の家々に一旦視線を馳せ、モルチェは窓から自分の部屋に戻った。

「ほら」

一階と二階をつなぐ階段のすぐ左奥にキッチンはある。そこには庭につながる大きな窓があり、モルチェの父は彼女が到着する前に既にいた。

「……誰から？」

モルチェは白い包みを受け取った。学校で使う教科書程の大きさだ。だが、小指の長さほどの厚さがあり、それなりの重量があった。表書きはモルチェ宛となっていたが、差出人の名前はなかった。

「モイロペリカンに聞いたが、答えかった。差出人に口止めされたとかでな。オールター・シリーズ（生物機械）の動物どもは皆、言い付けられたことにえらく忠実だ」

着古した木綿のシャツに栗色のズボンをはいた男は、忌ま忌ましそうにそう言つて足早に自分の部屋に戻つていった。

「ありがとう、父さん」

モルチェはうつむいて、包みを握りしめた。

（これはエトランゼが送つたものだ）

ハツと気が付き、モルチェは息を飲んだ。確信があつた。一見誰のものかは分からない美しい文字。けれど文字の語尾や記号につける装飾の仕方は間違いなくエトランゼのものだった。

モルチェは階段を駆け上がった。胸の高鳴りが外に洩れてしまひそうだった。指先が思わず震え、包みを取り落としてしまひそうだった。息が詰まり、幾度も大きな深呼吸もした。それでも苦しくて、胸を叩いてみたりもした。

（前には手紙もくれなかつたつけ……でも、あのときのことはエトランゼすら何も覚えていないんだから仕方がないんだけど）

部屋の扉を開け、向かつて右の壁に沿つて置いてあるベッドに腰掛ける。モルチェはペーパーナイフを使う気になれず、急いでその封に手をかけた。心臓が壊れんばかりに早鐘を打つ。期待の大きさに、そのまま倒れてしまひそうだった。

「……………開いた」

呟いて、モルチェは包みの中に同封されていた手紙に目をはせた。その一心不乱な様子とは対照的に、夜空の星々は静かに静かに光を湛えていた。

三章 迷い道

モルチェは不機嫌だった。

“さようなら、モルチェ……”

エトランゼは夢の中でそう告げた。幽霊のようなほっそりと美しい面影。一挙一動は水中にいるときのようなゆっくりとしたもので、風が吹けばそのままかき消えてしまいうさだった。明け方の夢は正夢になる……どこかで聞いたこの言葉がモルチェの心をつかんで離さない。

目の前を花屋の荷車が通り過ぎ、甘い香りが辺りに漂ったが、モルチェの心は一向に晴れなかった。

（何であんな夢、見ちゃったんだろう）

エトランゼが手紙に指定した場所に立ち尽くしつつ、道端に落ちていた石をつま先で弾いてみた。

暗く深い森の中。大木の下にはシダ植物が生い茂り、周りは土と水の匂いが立ち込め、遠くの方で鳥の声や動物の鳴き声が聞こえる。幾種類ものヒカリゴケが、ある一方のみを指し示し、照らし出されない場所が一層暗く歪んでいるせいもあって、モルチェはそちらに進むことしかできなかった。ようやく森の広場に出た、と思うとそこにはエトランゼがいた。彼女はぼんやりと光りながら髪を梳いていて、フイツとモルチェを見た。そして、いつものように笑いかけると、やはりいつものように様々なことを話しかけてきたのだ。この先にはマデイエス河の源流があるとか、そこには何千年も樹齢をへたように大きな杉の木があるとか、見たことのない形の木の実を拾ったとか……星の話題も出た。十字に光っているのが南十字星。ただの棒の集まりのようなのが時計座。昔の人が生きていた時代に発せられた光を私達が見ているかもしれないこと……それに、それぞれの星座に秘められた物語や、月の話。

「さよならってどういう意味よ、エトランゼ」

起きる直前にエトランゼが口にした言葉。妙に生々しく耳にこびりついている。

「あの… ちょっとすみません」

肩を叩かれ、少なからずモルチェはどきりとした。

「はい？」

顔を上げて相手の顔を確認する。モルチェはエトランゼが会ってほしいと手紙に書いていた男がその人であるとすぐに分かった。

「君ぐらいの年の女の子を捜しているのですが……こう、さらさらの短い髪で、背は君よりも少し低い、瞳が黄水晶のように綺麗な娘なんだけれど……見かけませんでしたか？」

しどろもどろに説明する男に、モルチェは普段の落ち着きをすぐに取り戻した。

「エトランゼなら来ませんよ」

今まで誰にも見せたことがないような優しい笑顔を浮かべて、モルチェは続けた。

「エトランゼ……あの娘のことですか？」

青年がエトランゼに名前すら聞いていなかったことに驚く。

「ええ。彼女から言伝を頼まりました。森に来てほしいって」

エトランゼの意図することが何なのか、モルチェには分からない。けれど、森に来いと記した手紙と昨日見た夢とが重なって、胸に鉛を埋め込まれたような不安は消えなかった。

「森へ？」

安直に言葉を繰り返す男に苛立ちを感じ、モルチェは両手の拳を握り締めた。この胸中を青年が知る由もないことは十分わかっていたが、理不尽な憤りは押さえようがなかった。

（何故エトランゼはこんな男を森に呼ぼうとしているんだろう？

何故私では駄目なの？ エトランゼ）

子供っぽい独占欲に一層心が重くなる。自分なんか彼女を独占することなどできるはずがない。頭ではきちんと分かっているのに。「古代杉の種子が見つかったところに、だそうです」

冷静を装って口にする言葉の一つ一つに刺を感じる。何故エトランゼは私をこんなに傷つけるのだろう……思つて、モルチェは唇をかんだ。

「わかりました。そこに彼女はいるのですね？」

「ええ」

男は礼を言うと、モルチェに優しく笑いかけた。

「親切なお嬢さん、どうもありがとう。貴女は彼女に信頼されていますね」

信じられない言葉を残して青年はそこから立ち去ろうとした。

（いいの？ このままこの人を行かせて）

焦燥感が胸に染み渡り、モルチェは踵をかえた青年の背を凝視した。

（エトランゼとの糸も切れてしまうのかもしれないのよ？）

心の奥底から問いかけが聞こえた。これから、もう永遠にエトランゼには会えなくなるかもしれない。それどころか、手紙の一通さえ来ないかもしれないのだ。もし、ここで声をかけなければ。

「……待つて」

男は驚くというよりも、寧ろその声を待つていたように微笑みながらモルチェの方に振り返った。

（どうしてそんなにきれいに笑うのよ。エトランゼみたいに）

学校の男子生徒にはない、純粹な微笑みだった。それに対して自分はどうだろう……モルチェは自分の心は黒炭やカラスアゲハなんかよりもよほど真っ黒だと思った。

「一緒に来ませんか？ 貴女は彼女に何か言いたいことがあるのでしょうか？」

風が青年の髪を揺らし、こけた頬をなぞってゆく。モルチェはこれ程真剣に他人の顔を見つめたことがないくらいにじつとその顔を見つめた。鼻孔に忍び込むものがあつた。陽光を一杯に吸い込んだ土の匂いだった。

（この人自身が木みたい）

真つすぐに空に腕を伸ばして体全体で日光を浴び、水と土を生涯愛する木そのものだ。

「お見通しですね」

安直な優しさは薄っぺらくて、すぐにメッキが剥がれてしまう。

人は傷付いた分だけ優しくなれるときいたことがある。ならば、どれだけの傷をこの青年は背負っているのか？

（つまらない焼き餅なんか焼かなければよかった）

「では、行きましょう。僕はデボーテⅡBⅡラズリ。植物学者の端くれです」

右手を差し出すデボーテ。モルチェはそのふしくれだった手を取ると、自分も同じように名乗った。

「私はモルチェ。モルチェⅡDⅡオパールです」

四章 道の始まり

日影にシダ植物が茂り、古い木々の樹幹には半円形のサルノコシカケが寄生して群れを成していた。空は遙か遠くにあり、孔雀石のような緑色の天蓋は陽光の帯を幾つも大地に落としている。木漏れ日は様々な形の模様を描き、それはモルチエの体にも斑模様を映し出した。春の銀色の太陽は優しい光の飛沫を木の葉の合間から投げかけている。

「影が青い。煙っているみたい」

溜め息と一緒に感想を漏らし、モルチエは上を仰いだ。太陽は衰えを知らないかのように輝いている。燃烧し尽くせばなくなってしまうことなど嘘みたいだ。

「葉が他の色を吸収しているんです。さ、こちらへ」

額に汗を浮かべ、デボーテは振り向いて見せた。その顔に疲れはない。

いらえを返しながらも、モルチエは空を見つめ続けた。

（もし私が森の奥深くに住んでいたら、空が恋しくてしかたがなくなるかもしれない）

土と水と木々の匂いは風が吹くたびに体の中を空っぽにする。体内に清涼感が満たされてゆくのがモルチエには分かった。

本当に大切なものは目に見えて触れるものだ、とモルチエは感じた。目に見えない個人個人の感情など、自然はいとも簡単に陵駕してしまう。

前に行く青年に目を向けて、モルチエはその体の線をたどった。

（すごく痩せているみたい……）

森の調査をしていると言っていたわりに、デボーテはだぶついた動きにくそうな服装をしている。サイズの問題だけでは無さそうだった。

「エトランゼさんは何故ここに僕を呼ぼうとしたんでしょうね？」

無言になったモルチェに、デボーテはそう切り出した。

「わからない……あの子、一週間くらい前から行方不明なの。森に行く約束をした日から」

モルチェは今までのことを要略しつつ話した。約束の日の朝から彼女の姿が消えたこと。三年前にいなくなったときは四、五日で発見されたこと。そして、エトランゼから届いたあの手紙のこと。

「すぐに見つかると思ったわ。でも、手紙が来たことでデボーテさんが来るまでは彼女と連絡が取りようがないことがわかって……昨日、夢をみたんです。エトランゼが去っていく夢。私、あの子を失いたくない……」

立ち止まって、木綿の服の胸元をギュツと握り締める。今日あったばかりの人に何故こんなことを言っているのだろうと思うと、モルチェは苦笑した。それは、青年の持つ雰囲気かなせる技かも知れなかった。

「一緒に生きたいんだね」

再び振り返った青年に、モルチェは大きく頷いた。

「どこまでも一緒に行けたらいいのにね」

デボーテはそれから口をつぐみ、再度行軍を開始した。モルチェも足元の木の根につまずかないように気をつけながら、彼の後に黙々とついていった。

何をしているの？ と口にしたモルチェに、エトランゼは川面から目を外さずにこう答えた。

「下の大地が見えないかなと思って」

水面には二人の幼顔の少女が写っている。エトランゼはしゃがんで真剣に河を覗き込んでいたが、モルチェは立ったまま、チラリと目をやっただけだった。

「何時間見つめたってそんなの見えないわよ。このうきしまにはむぎだっっておりいぶだっ実をつけるわ。土があるのに下を見るなんてできっこないもん」

けれど、澄んだ珪砂の川底を見つめたまま、エトランゼは動こうとはしなかった。

「この土もこの川の水も昔は下の大地にあったものよ。私は土や川の夢を見たいの」

藻が河の流れに沿って揺れている。岩にぶつかって金粉を吹き上げる川面を、モルチェはエトランゼの隣で眺めた。

時間がゆっくりと流れてゆく。ついにモルチェはたまらなくなつてあくびした。目尻に浮かんだ涙を拭い、エトランゼに視線を戻すと、彼女はまだじつと川面を見つめていた。

「……土が泣いてる……」

河の音にかき消されてしまうほどの大きさの声で、エトランゼは呟いた。

「かわいそう。どうして泣いているの？」

本物の涙がエトランゼの瞳にはあった。

「つかれたの？ いっぱい、むぎやおりいぶを作ったから。それでも休ませてもらえないから」

大粒の涙を見せるエトランゼ。モルチェはその様にアツケに取られた。しかし、幼いモルチェはエトランゼを放っておくことができなかった。

「ねえ、家どこ？ 送ってあげるから泣かないでよ、ね？」

問いかけたモルチェに、エトランゼは涙と鼻水でぐしょぐしょになった顔のまま微笑んで見せた。モルチェも笑った。それから河の水で彼女の顔をすすいでやり、ついでにこう付け加えた。

「だいじょうぶ。お父さんが前に言っていたもん。この島はいつかは下の大地におりるって。そうしたらいっぱい休ませてあげられるわ」

水草が水にくゆるように、西の丘の上に生えたまばらな木々が、季節外れのモンスーンに大きく大きくその身を揺らしていた。

水音が聞こえてきて、モルチェは白昼夢のように昔のことを思い

出していた。もう、十年以上も昔のことだ。

「もうすぐですよ」

空は段々と青くなってきた。董青石の青色をしている。透明で、奥深い青色。寄り添ってくるようなしっとりとした色だ。日光は木の幹に遮られてわずかに糸ほどの線を引くに止まっている。

随分森の深いところまで来た。木々についたヒカリゴケが緑白の光を放ち、小さな羽虫達がふうわりと漂い始めている。土笛の音のようなアオバズクの鳴き声が、森のどこから聞こえて来る。

「木々の様相が変わったのがわかりますか？」

デボーテの実に楽しそうな言葉は、しかしモルチェの心にはあまり響かなかった。

（夢は夢よ）

水のわき出る音がこぼりこぼりと大きくなってきた。

「ここがマディエス河の源流です」

デボーテの指した所に小さな泉が湧いていた。

「これのお陰でこのヒカリゴケは非常に発育が良いんですよ。湿気が好きですからね、苔は」

モルチェは血の気が引く思いがした。エトランゼの言うとおりに、マディエス河の源流はこの森にあったのだ。しかも、

「……杉の木」

大昔の人が神と崇め奉った理由がわかるような巨木の群れが、そこにはあった。

「そうです。この先に種子が見つかった場所があるのですよ」

デボーテの説明を最早モルチェは聞いてなかった。夢の中でエトランゼのいた場所がすぐそばにあることは、揺るぎない現実として横たわっていた。

（エトランゼはいる。ここに）

足が勝手に動き出す。

「モルチェさん？ どうしたんですか？」

走りだしたモルチェをデボーテは引き留めようとして叫んだが、

その声に反応したのは森の動物達ばかりだった。複数の鳥が飛び立って行く音が断続的に繰り返され、やがて森はにぎやかな静寂を取り戻した。

少女の走り去った方向に向かって、すぐさまデボーテも足を速めた。

何度も木の根につまづきながら、モルチェはさらに奥へと進んでいった。ヒカリゴケが夢に見たように、ある一方向に向かって燐光を発している。まるで一体の生き物のようだ、とモルチェは思った。燐光は鼓動しているような動きを見せていた。連鎖的に瞬いては消えるヒカリゴケの群れ。

いつの間にか帳を降ろした空に、星が瞬いていた。モルチェは自分がどこをどう走っているのかわからなかった。

（私は今、地面を走っているの？それとも夜空を走っているの？）

境界線はすっかりと闇に溶け込んでいる。聞こえるのは鳥や動物の鳴き声。虫の声。羽ばたき。葉擦れの音。湧き水が流れる音……挙げれば限がない。風が種を落とす音。種が種皮を割る音。樹木が水を吸い上げる音。根を張る音。昆虫が枯れ葉を押しつける音。キノコが菌糸を伸ばす音。

「歌声？」

風の音に混じってかすかに聞こえてきたものにモルチェは耳を傾けた。不思議な音色だった。聞いたことのない曲なのに、どこか懐かしい。苔はそのメロディーに合わせるように波打っていたのだった。

（心の琴線に触れてくるみたいだわ……）

空間が開けた。辺り一面にはヒカリゴケを身に纏った木々があった。歌が止む。

「モルチェ、私はここよ」

木々の中心で、捜し求めていた少女はぼんやりと輝いていた。それは闇の中のロウソクの炎を思わせた。

「エトランゼ」

突然現実に戻され、呼吸を荒くしてモルチェはエトランゼに詰め寄った。あんまり息苦しくてむせてしまい、涙まで出てくる始末だ。

「ごめんなさい」

儚く微笑みかけるエトランゼ。モルチェの涙は生理的なものではないそれに変化していった。

「泣かないで。本当にごめんなさい。貴女を一人にして」

立っているエトランゼの足元にすがりつき、子供のようにモルチェは泣いた。涙が止まらない。

「どうして……何故？」

話したい内容がうまく言葉に表せず、モルチェはただ一途に問いかけた。

「三年前のことを覚えているかしら」

エトランゼはモルチェのそばに腰を落とすと、彼女の背中を霧よりも軽く撫でた。

「あんだ、あのときのこと思い出したの？」

嗚咽で言葉はすなりと出なかったが、モルチェの言いたいことがエトランゼにはわかったようだった。

「あの杉の木が教えてくれたの。私が本当は人間じゃないって」

涙を拭い鼻をすするモルチェ。エトランゼは続けた。

「杉の種子。私は木霊と呼ばれる存在。でも、私は貴女と一緒にいたかった」

貴女は特別だったのよ？ とエトランゼはいたずらっぽく笑った。

「お母さんはそんな私の気持ちを察してくれた。記憶を消し、時間をくれたのよ」

「そんな……でも、まだ三年しか経ってないじゃない」

笑みは、寂しげなものに変わった。理解を求める空気を、モルチェは払拭したくてたまらなかった。

「私が『私』でありながら貴女のそばに居られる日がいつか来ると

言われたわ」

モルチェはようやく気が付いた。あのデボーテという青年は、植物学者だと言っていなかっただろうか。

「あの人がそれを可能にするというの？」

エトランゼは頷いた。

「時間にかかるかもしれない。過ちを犯すかもしれない。それでも、波紋は広がってゆくものの」

「嫌よ！ 私はあんたともっと話をして、もっと一緒にいるんなことを……もっと、たくさん……」

嗚咽が言葉を詰まらせる。搾り出すようにしてモルチェは言葉をつむいだ。

「どうして」

そんなモルチェの手に、エトランゼは自分の手を重ねた。

「モルチェ、泣かないで。私まで哀しくなってしまうわ」

暖かい眼差しに覗き込まれ、モルチェは再度顔を歪めた。

「私はどうしたらいいの？ 今までただ、あんたに引きずられてきた。今更一人にするなんて、酷いよ」

劣等感が心を黒々と蝕んでゆく。そこに哀しみと焦りが混ざり合い、胸がつぶれそうだ。

「貴女は大丈夫よ、モルチェ。貴女は本当に大切なことを理解しているもの」

モルチェは頭を振った。鼻の奥がツンとする。

「あんたと対等になれると自惚れていた。世界の美しさによろしく気づいて、自分の世界があまりにもちっぽけだったことに気づいて

……」

「そうかもしれない。でも、貴女は気が付くことができたでしょう？ 貴女も私も同じなの」

モルチェはエトランゼの顔を見上げた。彼女は相変わらず優しく微笑んでいた。その瞳はいつもと変わることなく穏やかで、高まっていた相手へのわだかまりが溶けてゆくのがわかった。

「私たちは生きるために生まれたのよ。そこに優劣はないわ。共生することですか私たちは生きられないの」

「エトランゼ」

重ねられた手に視線を落とす。エトランゼの手の下に、自分の手の甲が透けて見えた。

モルチェは理解せざるを得なかった。これが彼女との最後の邂逅になることを。

「モルチェ、一つだけ頼みを聞いてくれるかしら」

もうほとんどエトランゼの姿は消えかかっていた。輪郭が空気に交じり、楕円形の金色をした発光体になろうとしている。

「この浮島はいずれ下に落ちるわ。大地に降りたら私たちをそこへ植えてね」

微笑む気配がした。陽光よりも暖かい……全身が温かった。そのどこよりも目蓋の奥が熱かった。

「……また会いましょう……」

空気に溶けてゆく光の塊。それは引き伸ばされて薄れ、やがて消えた。

モルチェは双眸に涙を浮かべたまま空を仰いだ。涙がこぼれることに心は軽くなっていくようだった。

「モルチェさん、聞こえますか？ モルチェ？」

遠くから声が聞こえてきて、モルチェは眉を寄せた。この心地よい微睡みを妨げる声が一体誰のものなのか、そんなことを考えることすらまどろっこしい。

「こんな所で寝ていては風邪をひきますよ」

困惑の色合いが濃いその言葉に、モルチェは仕方がなしに起き上がった。辺りは明るく、樹木の匂いが白く漂う霧に乗って森のすみずみに満ちていた。

「……デボータさん？ エトランゼは……」

言いかけて、モルチェは口をつぐんだ。

「彼女に会ったんですか？ 僕は見かけませんでした」

デボーテの言葉にモルチエは「やつぱり」と思った。金輪際、エトランゼは人としての姿を他者に見せることはないだろう。

「そうですか」

複雑な気持ちが始まり合っていた。最早、エトランゼと意志の疎通はできない。彼女は彼女自身に還っただけであるのに、喪失感が拭い切れなかった。

「エトランゼは消えたんです」

一度は納得した彼女との別れに、モルチエは後悔し始めていた。話をして、笑って、怒って……一緒に生きていきたいと思ったのは、モルチエの中で一番大切な願いだったのだ。

「彼女は木霊だったの」

モルチエは放心したまま続けた。泥水に浸かったような疲れが心を満たしている。デボーテは彼女の姿に同情の眼差しを向けながら語りかけた。

「モルチエさん、彼女が木霊だったというなら、エトランゼさんたちが消えるときは私たちが滅ぶときでもあります」

モルチエの傍らに腰をかがめ、デボーテは落ち葉に埋もれた地面を指差した。青年の指先にある地面を、モルチエは落ち込んだ気分のまま眺めた。

「これ……」

しかし、少女はすぐに眼を見開いた。地面には様々な形の木の实が落ちていた。その木の実に混じっていたあるものがモルチエの眼を引いた。落ち葉ごとそれをすくい取った彼女の掌には杉の種子があった。

「なめらかな卵形の球果ですね。こんな完全なものは初めて見ました」

数十の鱗片で構成されている薄茶色の球果は、松ぼっくりとは比べ物にならないくらい上品だった。美しく整った形の種子は、エトランゼの瞳や髪の色と同じ色をしている。

「エトランゼ……」

力を込めれば崩れ落ちてしまいそうに繊細で熟した球果。モルチエはそれを大事に大事に両掌を包み込んだ。

「……私、彼女を育てるわ」

決意が固まってゆく。

「デボーテさん、教えてください。エトランゼたちを下の大地一杯に育ててあげたい。この子たちが世界中に枝を広げる様を私は見たいんです」

そうすればまた彼女と会えるだろうか？ いや、会えなくともいい。エトランゼの願いを叶えてあげられるなら。それだけで彼女には自分の思いが伝わるはずだとモルチエには分かっていた。

「無理でしょうか？」

不安そうに問いかけるモルチエ。デボーテはゆっくり首を振った。

「貴女がそう望むのであれば世界は変えられますよ」

少女を立ち上げながら、青年は静かに微笑む。

「私たちはそういう生き物なのですから」

青々と色づいた翡翠の天蓋は霧が薄れるにつれて明確になっていった。様々なわだかまりがほどけてゆく。

—— また会いましょう ——

葉擦れの音に混ざって、エトランゼの声が聞こえたような気がした。

(END)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0678e/>

BlueStone [木陰]

2011年7月20日03時31分発行